2003年12月17日

ペシャワール会報

No.78

ペシャワール会　〒810-0041
大名一丁目10-25　上村第二ビル三〇七号　福岡市中央区
電話　〇九二（七三一）一三七一
FAX　〇九二（七三一）一三七三

表紙絵　帰郷農夫ジャマル　　甲斐大策

混乱の政情下、水利事業は総力戦へ	中村　哲
ラマダンの意義を理解できたような気がします	仲地省吾
用水路建設は増水前の集中工事です	鈴木　学
井戸と用水路建設の事務方で奮闘中です	大越　猛
正念場	橋本康範
生活、病気、そして患者も「日本と違う」	柴田俊一

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

ペシャワール会インターネット
ホームページ　http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/
電子メール　peshawar@mxb.mesh.ne.jp

混乱の政情下、水利事業は総力戦へ

用水路建設のべ五万人動員、取水口工事は今冬完了

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長　中村哲

用水路工事、雪解け前の正念場

みなさん、お元気でしょうか。冬に入った現地では、今PMS（ペシャワール会医療サービス）の事業が最大の山場を迎えました。これまで、再々会報などを通じて報告してきた用水路の仕事が、正念場に入っているからです。

取水するクナール川は、インダス河の支流にあたり、河川敷の幅一キロメートル以上、とてつもない大河です。ヒンズークッシュ最高峰の連山の雪から溶け出す水は、季節変動が激しく、夏と冬の水位差が三・五メートルを超えます。あと三ヶ月もすると、洪水のような雪解け水が押し寄せます。従って、今冬に取水口部を仕上げないと、工期を一年延ばすことになります。そこで、「この二、三ヶ月が我々の将来を決める」と宣言、六百数十名の作業員による人海戦術だけでなく、大型掘削機（ユンボ）四台、ダンプカー三台、大型ローダー二台、コンクリート・ミキサー五台、トラクター一〇台以上と、これまでにない機械力を投入、取水口から二キロメートルまでの地点に作業員がアリのように殺到、突貫作業が開始されました。

先ず主流を堰き止めて傍流を作り、川底を干して取水口部と水門の工事を行います。初めの二キロメートルは相当な水量、毎秒約八～九トンを引き入れるので、水路両岸の洗屈が起こらぬよう、万全の護岸工事を行わねばなりません。どの部分が遅れても失敗しますので、チーム分けを適切に行い、無駄なく短期間のうちに終えねばなりません。

小生も現場に張りつけになり、全てに優先、陣頭指揮をとっています。橋本君を初め、農業や水源事業にかかわる日本人十数名、百六十名の現地職員、それをペシャワールのPMS基地病院が全面的に支えています。取水口および最初の三キロメートルだけで、護岸に使う蛇籠（じゃかご）が三千個以上、六六トンの針金が使用され、これも現場のワークショップが六月以来奮闘して生産を完了しました。五月以来の作業員はのべ五万人を突破、岩盤のダイナマイト爆破回数は六千回以上、現在一日百発の爆破が行われています。

文字通りの「総力戦」で、十数万人の旱魃（かんばつ）

伝統的な用水路
（左上は外国団体が補修したコンクリート壁の水路）

難民が帰農できるか否かの瀬戸際です。地元民もアフガン政府も固唾を呑んで見守っています。

ここで私たちが採用したのは、現地の人々が独力でも維持できる伝統工法です。取水口とトンネルを除けば、全て石と土、植林で水路ができます。護岸のために使用する柳の木は、日本在住の或るアフガン人が寄付してくれ、約三万本が用意されます。

用水路C地区の掘削現場

相次ぐ難問――米ヘリが誤射

しかし、この非常時に限って、例によって様々な難関に遭遇いたします。

十一月二日には突然米軍ヘリ二機が旋回して機銃掃射を我々に加え、作業地の平和なムードが吹き飛ばされました（別掲資料）。取水口のあるクナール州には、現在米軍兵力が続々と集結、不穏な雰囲気です。

前後して北部のガズニ州でフランス人女性が殺害され、これに抗議する国連やNGOが至る所で活動を停止しました。カンダハル州では日本のJICA（国際協力機構）の道路工事が妨害を受けたと聞きます。私たちの主な活動地であるニングラハル州でも、PMS以外の動きは殆どないようです。

イラク参戦の影響か、対日感情にも陰りが見られます。職員の寝泊りするダラエ・ヌール診療所では、「日本人医療関係者を来させるな」と付近住民が抗議します。クナール州やヌーリスタン州の職員交代も次第に困難になっています。二年前の空爆下でも、こんなことは考えられなかったのです。

これに心ない意地悪が加わります。作業地対岸で行われた外国NGOの工事の影響で水流が変化、激流が川沿いの国道を破壊、私たちの水路の一部に迫っています。これを守る余分な工事も、結局私たち自身が冬の間にやらねばならなくなりました。

「外国人が引き上げるこの時期に！」

憤懣やるかたない職員一同を叱咤し、「議論のための議論は無用。ただ実行あるのみ。この際、全責任は中村がとる故、限られた期間内で各自の持分を果たすこと」と、全工程の指示を私が出すことにしました。臨戦態勢で張り詰めた空気がみなぎっていますが、みな意気軒昂です。

でも、捨てる神あれば拾う神あり。日本人ワーカーの中には土木に明るい若者、飛び入りで駆けつけた石橋さんが掘削機械の経験者、農業担当の橋本君がよく皆をまとめ、心強い限りです。また、カーブル政府の「灌漑省」から「日本人技師を伴って説明せよ」と呼び出しをくらい、それまでジャララバード出張所から無体な要求をされ続けていたので、悪くすれば作業中止命令かと恐れて出頭しました。しかし意外にも「外国人が引き上げるこの時期に」と激賞され、進んで協力を申し出てくれました。

ついに日章旗も消し……

今、殆どが農民たるアフガン人が欲するのは、食糧と平和な村々の回復です。東部アフ

護岸のために使用される蛇籠

ガンは未曾有の旱魃で耕地が砂漠化し、大量の難民が発生しています。彼らが大都市に流れ、治安悪化の背景をなしていることを認めない者はいません。建設中の用水路は十数万人の帰農を促し、少なからず地域の平和に寄与するでしょう。

にもかかわらず、このところ現地では、米軍に対してだけでなく、国連組織や国際赤十字、外国NGOへの襲撃事件が盛んに伝えられています。「アフガン人は恩知らずだ」と言って撤退した国際団体も少なくありません。

しかし、現地側が当惑するのは、そもそも「復興」が「破壊」とセットで行われ、それも外国人の満足が優先するからです。結局、軍事的干渉は取り返しのつかぬ結果を生みました。人々が生きるための無私の支援なら、どうして武力が必要でしょうか。そのような活動は皆こぞって守ってくれます。私たちは少なくとも地上で、一度も攻撃を受けたことがありません。PMSでは以前は歓迎された日章旗を消し、「政府とは無関係だ」と明言せざるを得ない事情に至りましたが、やはり日本人の誇りというものがあります。

平和とは消極的なものではありません。それは戦争以上に忍耐と努力、強さが要ります。「平和」は、私たちの祖先が血を流して得た結論の筈です。弱い者に拳を振り上げて絶叫するのは、人として卑怯かつ下品な行為です。ひとつの国が軍隊（自衛隊）を動かすことがどんな重大事なのか、おそらく、この愚かさと無関心は、近い将来、より大きなツケを払うことになるでしょう。「日本は既に米国の一州となった」と言われて是非もなく、尊敬されるどころか、攻撃の対象となるのは時間の問題でしょう。ひしひしと迫る破局の予感の中で、アフガニスタンの現状を見て、「この償いをどうしてくれる」と言いたいのが実感です。

それでも悲憤を抑え、「だからこそ自分たちが此処にいるのだ」と言い聞かせ、砂漠化した大地が緑化する幻を見ては、わが身を励ますこの頃であります。

中村哲（なかむらてつ）

九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来十九年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、現在アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立、診療にあたっている。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、今春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約一五万人（２００２年度）。

資料1　2003年11月2日に起きたＰＭＳ用水路建設現場への米軍ヘリ誤射事件
現地代表・中村哲医師による日本外務省への報告

日本外務省　アフガン担当関係者殿

前略

先日、「ペシャワール会の作業現場に米軍ヘリコプターが機銃掃射を加えた」という旨の報道が流されました。報道内容から誤解されうる点もありますので、以下現場の証言者として事実関係をお伝えし、今後の安全のため、参考に供したいと存じます。

事件は、11月2日午前10:25（アフガン時間）頃、ＰＭＳ（ペシャワール会医療サービス）の灌漑用水路作業中、クナール州南部のジャリババ付近、ジャララバードから北東約３０ｋｍ、岩盤沿いの工事現場でありました。チャガサライ方面へ向かう米軍機らしきヘリコプター５機が現場　上空を通過中、うち２機が突然超低空で旋回してきて機銃掃射を加えました。

ちょうど同時刻は、５月以来毎日、数十回の発破作業で掘削を進めている時間帯です。発破作業については、ジャララバード州政府、Planning Ministry 及び治安担当責任者に許可を得ており、ダイナマイトは信管でなく導火線式のものが許可されています。

攻撃地点はダイナマイトの爆破した場所で、小生を含む邦人３名、ＰＭＳの現場監督約２０名、作業員約６００名は爆破時間帯のため、１００ｍ以上離れた所に退避して眺めていました。しかし、爆破班の職員は、不発弾を確認して再度、導火線着火に赴きますから、かなり近接した場所にいたはずです。驚いた彼らが、手ぬぐいを振り、作業であることを知らせると、ヘリコプターはそれ以上旋回して飛来せず、山向こうへ去りました。

報道ではあまり触れられませんでしたが、ご承知のように、ニングラハル州は今、耕地の砂漠化が深刻な場所のひとつであり、膨大な数の農民が難民化しております。このために都市に流入した彼らが困窮して、治安悪化の一因をなしていることは、よく知られているところであります。ＰＭＳでは、二千ヘクタール以上の灌漑で１０万人が帰農できると推定しており、緊急性も考慮して、１６ｋｍの用水路建設に励んでおります。ペシャワール会としましては、政情や米軍の動きよりも、こちらの方に関心を集中し、何とか１年以内に工事を完成してアフガン復興に貢献したいと考えております。

なお、一部の報道で「カーブルの日本大使館へ通報した」との記述がありましたが、これは誤りです。事実確認をしてから知らせるつもりでいました。

安全性につきましては、連絡を密にして、最大の努力を払いたいと思います。しかし、少なくとも地上では、アフガン政府、住民、ペシャワール会が一体になって進めており、不偏不党を厳守し、アフガン政府関係者も激励すると同時に、治安当局や地域のジルガ（長老会）も安全を保障いたしております。

微力ながら、アフガン復興のために力を尽くす所存でございます。

以上をご連絡いたします。

平成１５年１１月１３日

ＰＭＳ（ペシャワール会医療サービス）　総院長　中村哲

資料2　同事件　現地代表・中村哲医師による日本外務省への回答要望

外務省中東第二課アフガニスタン担当御中

いつもお世話になります。

私どもが11月13日に御報告しました件（11月2日、アフガン・クナール州の灌漑用水路工事現場で、米軍ヘリコプター2機が機銃掃射）につき、米軍より回答があったと聞き及びました。本日の朝日新聞（西部本社版）によると、「現地の米国大使館のシドニー臨時大使が17日、連合軍副司令官を伴って日本大使館を訪れ、調査結果を報告、謝罪した」とあります。

私どもと致しましても、今後の安全のために、米軍の回答を確認したいと存じます。

上記の件、文書にてお知らせいただければ幸いです。

2003.11.21

ペシャワール会現地代表　中村哲

資料3　同事件につき米国大使館より日本外務省を通じてなされた報告

ペシャワール会現地代表　中村哲殿　　平成15年11月27日

アフガニスタン東部での米軍ヘリコプターによる銃撃事件に関する貴代表からの21日付ＦＡＸでの御照会に関し、これまで外務省が行った申し入れ及びそれに対し米側よりなされた説明等につき御報告申し上げます。

11月12日、在アフガニスタン大使館藤井書記官より藤田ペシャワール病院院長代理及び福元広報責任者に対し本事件につき問い合わせ、また、13日、貴代表より中東第二課に対し同日付ＦＡＸにて今次事件につき連絡を頂きました。

これを受け、15日、当時カブールを訪問中の田中外務大臣政務官より、アフガニスタン移行政権シールザイ外務副大臣及び在アフガニスタン米国大使館シドニー臨時代理大使に対し、銃撃があったとすれば遺憾である旨述べると共に、事実関係の確認及び再発防止策の徹底を申し入れました。これに対し、シールザイ副大臣及びシドニー臨時代理大使より直ちに事実関係を究明したい旨応答がありました。

その後、17日、シドニー臨時代理大使及び連合軍副司令官ククロー大佐より在アフガニスタン日本大使館高川臨時代理大使に対し下記の通り説明があり、併せ謝罪がなされました。右の概要については、19日、在アフガニスタン大使館藤井書記官より藤田院長代理に御連絡差し上げております。

記

1. 事実関係

(1) 当該地点におけるペシャワール会の活動について移行政権より報告はなく、当時米国として右活動につき承知していなかった。本件調査も当初は日本ＮＧＯの人員及び車両に対する発砲事件として調査を行ったため、米軍の記録中に本件を発見することができなかったが、その後日本政府側からの更なる説明を受けて公式調査を行ったところ、11月2日に当該地点で米軍ヘリコプターによる小規模な発砲が行われたことが判明した。

(2) 同日、輸送ヘリコプター編隊4機（先頭に大型輸送ヘリ、次に中型輸送ヘリ、攻撃ヘリコプター2機が追随）が高度約200フィート（約70ｍ）で編隊飛行中、当該地点で先頭ヘリコプターが下方に水面の飛沫、泥土の飛散を認めた。無線で連絡を受けた2番機も右を確認し、ドアに据えられた機銃一丁より北側の地面の粉砕部と水流に向けて10～20発の弾丸を発した。地上に攻撃者が認められず、反撃も無いことを確認して即時に射撃をやめた。

(3) 護衛位置に付いていた攻撃型ヘリコプターは旋回し、現場を低空飛行して状況を確認したが、攻撃は一切せずに編隊に戻った。何れのヘリコプターも地上の人員や白いタオル等は視認していない。この地域における唯一の視認記録として残されているのは、山羊乃至羊の群を連れ、ＲＰＧ（対戦車砲）を肩にかけて歩いている人間1名のみであった。

2 .米からの謝罪

今回の事件に関しお詫びしたい。また故意ではないことを強調したい。しかし米軍ヘリはほぼ毎日地上からの銃撃等の攻撃を受けており、また、戦闘で友人を失っているため非常に敏感になっている。今回は水飛沫や泥土の飛散が機関銃で低空ヘリを射撃するときに水面や地表に出来る痕跡に酷似していたため、警戒して射撃を行った（超低空で飛行する航空機に銃撃を加える場合、打ち始めの銃弾は最初に地面にあたることが多く、航空機の下方の水飛沫、泥土の飛散は機中からはあたかも攻撃のサインのように見えるとのこと）。

3. 再発防止策

(1) 16日夜より当該地点にＲＯ´Ｚ（Restricted Overflight Zone）を設定し低空飛行を制限することにした。今後米軍航空機が当該地点を低空で飛行することはない。

(2) コンピューター・システムに正確な地域の情報を入力し今回のような事故を防ぐため、できるだけの情報を日常的に知らせて頂きたい。特に爆発物の使用等は必ず連絡してほしい。また、この種の連絡は政府ルートの他に、ジャララバード米ＰＲＴ司令部にも知らせて頂きたい。ＰＲＴには文民も含まれているので、必要に応じ積極的に接触してほしい。

外務省中東アフリカ局中東第二課長　相星　孝一

資料4　上報告につきペシャワール会側から再度なされた返答

外務省中東アフリカ局中東第二課長　相星　孝一殿　　2003年11月28日（送付12月5日）

ファクスにて文書を受け取りました。以下、ＰＭＳ（ペシャワール会医療サービス）側の返答をお伝えします。

記

1. 事実関係で符合しないのは、旋回して確認して、視認したのは「ヤギや羊を連れ、対戦車砲を担いで歩いている人間1名だけだった」という点。現場は約2kmにわたって600名以上の作業員、職員が居て、掘削機4台、大型ローダー1台などの重機、ダンプカー数台、トラクター10台以上があり、線状に伸びる水路が視認できないのは奇妙に思われる。「対戦車砲」を確認できるほどの精度ならば、この報告は現場のものとは思われない。

2. 誤爆や誤射が故意でないことは当然である。「毎日攻撃を受け、戦友を失った兵士が敏感になっている」というが、当方にも空爆や誤爆で親族を失った作業員・地域住民が少なからずいて、敏感になっていることにも思いを致して欲しい。

3. 「警戒して射撃した」というのも適切ではない。確認の上攻撃するのが常道である。

4.再発防止については、ひとえに軍側の注意と責任ある行動による。ＰＭＳは現地の正式行政機関と日本大使館に報告しても、米軍機関とは一切接触することは考えていない。ジャララバード米ＰＲＴ司令部との接触は、「米軍協力者だ」と住民に誤認されて却って危険である。以上。

ＰＭＳ（ペシャワール会医療サービス）総院長　中村　哲

＊ワーカー通信

ラマダンの意義を理解できたような気がします

ＰＭＳ医師　仲地省吾

ラマダン（断食月）

十月二十八日からラマダン（イスラムの断食月）が始まりました。ラマダンに入ると外来患者さんも少なくなります。病院の勤務時間にも変更があります。通常、仕事は午前八時から午後四時までで、昼休みが一時間あります。ラマダン中は昼食時間がないので、その昼休みの一時間を差し引いて午後三時に終わりです。昼の休憩がない代わりにイスラム教徒には三十分のお祈りの時間が保証され、お祈りの間に日本人ワーカーやクリスチャンの職員は食事をします。ペシャワールのＰＭＳ病院では、それほど気兼ねなく水を飲んだり、昼食もとれますが、アフガン側の職場では、完全に断食体制に入るため日本人ワーカーの皆も苦労しているようです。驚いたことにワーカーの中にはイスラムの職員と一緒に断食を遂行する者（橋本さんや鈴木さん）もいて、大変感心させられます。断食といっても日の出から日没までの間だけですから、今の様な涼しい季節のラマダンは比較的しのぎやすいそうです。このラマダンは約二週間ずつ一年ごとにずれていきますので、一回転するのに二十年くらいはかかることになります。ここでは夏の猛暑は五十度近くにもなり、通常の夏でも日射病で死亡するというニュースが頻繁にあるくらいですから、真夏のラマダンの苦しさは想像を絶します。ラマダンの断食は十五才以上から始めます。我がＰＭＳの職員はほとんどが若年層なので、みんなまだ夏のラマダンを経験したことがないのです。

おかげで夕食が美味しい

私にとってラマダン中は嬉しいことと厳しいことの両方があります。嬉しいことは、患者数がぐんと減って病院内が穏やかになり、勤務時間も早く終了することです。厳しいのは病院食の昼食と夕食のメニューが同じになることです。ラマダン期間中は基本的に昼食はないというのが原則になっているのでしょうか、食堂では夕食の準備だけをしており、昼食をとる日本人などはその夕食のメニューを昼に食べさせてもらうというわけです。ＰＭＳの病院食は日本の食事のイメージと比べるとおそろしいほど単純です（内容は多少変わっても味付けは一週間同じという不思議なメニュー）。しかし、幸いにそれ以上に私の胃はもっと単純にできていて、空腹でありさえすれば何でもおいしく、私はＰＭＳに赴任

内視鏡の実地指導を行う仲地医師

クナール川の滔々たる流れ

して以来現地の食事をまずいと思ったことは一度もありません。しかしラマダン中は昼食と夕食が同メニューで、しかも夕食は五時過ぎの非常に早い時間に始まりますので、さすがに昼食をとると夕食にはまったく食欲がわきません。それでラマダンの後半から私も昼食抜きを試みたところ、夕食がとてもおいしくなり一件落着です。ラマダン中のイスラム教徒の気持ちをほんの少しだけ理解できたように思いました。

夕食時はいろいろ買い足ししたり自分たちでも料理したりして病院の職員達もみんな集まって楽しそうに食事をしています。ラマダン中の夕食はとても大切で、各家庭では家族、親戚や知人が集まって食事をする様です。改めて家族の絆を強くする月でもあるのです。このラマダンも十一月二十五日が最終日でした。二十五日の夜は街中が嬉しいのか、ピストル、ライフル、大砲(?)の音がひっきりなしに聞こえました。

盆と正月とGWが一緒に来たような……

ラマダン明けの連休がイードで、イスラム教徒にとっては一年で一番嬉しい祝日です。ここでは正月はまったく普通の平日扱いですから、イードは日本でいえば正月と盆とゴールデンウィークを合わせたぐらいの規模なのです。ですから入院患者さんもほとんど帰ってしまいます。こちらでは日本の病院の様に一時外泊という習慣はあまりなく、少々症状が残っていても退院するのです。七十床の内、残っているのは数人の患者さんだけです。当然ドクター達もこの間は日当直をしたくないので、日本人医師の私と柴田医師でまかなうことになります。今年のイード休日は四連休で、訪れる外来患者さんもほとんどいなくて、日当直という拘束状態ではありましたが、とても静かな休日を過ごすことができました。

イードが終わるとまた新しい年が始まるという感じです。また改めて気を引き締めて働こうと思います。

表紙をめぐる小さな物語39

帰郷農夫ジャマル

甲斐大策

一帯の荒地より更にすさんだ地面としか見えない墓地の上方に、枯草を巻き上げ、土埃の柱が立つ。ジャマル・ハーンがチャマン近くの難民地区からガズニ近郊の村へ戻って三年、生活は戦時以上に逼迫していた。パキスタン側への流出時、故郷への出撃で、派閥や族長からの給付が生活の糧をもたらす哀しい現実を抱えながら、一家五人は食いつないできた。

帰郷して三年、カレーズは涸れ果てたままである。収穫は無に等しい年を重ねている。

難民地区でもジャマルは小作人の生活だった。クエッタから時折やってくる地主は、罌粟を植えなければ水を廻さない、といったものである。それは、ある国の政府が派遣した青年達のボーリングによる水だった。青年達は、噴出する水の下で歓声を上げその国の国旗を掲げ、喜色満面、記念撮影をして去った。やがて地主は、その水を用いる農夫や家畜の持主に金を要求するようになり、地下水脈は、数千年の歴史を終えて涸れた。その地域には、水をめぐる刺々しい感情がしみわたっていったのだった。

ジャマルは、数日後のラマダ(ザ)ン明けの食事を楽しみにしている子供達に、馬鈴薯の種芋を回そう、と決めた。パキスタン側で起った事故を知っていたから、地主から与えられていた発芽防止の液剤は用いてなかった。

今年は、ラマダン明けからほぼ一ヶ月でイサァ(イエス)の誕生日がくる。その日は何をするわけでもないが、いつもより回数多く祈るのもいい、と思った。種芋に手をつける決心が気持を軽くした。ジャマルは、足元の土くれを崩しにかかった。遠く、妻と長女が、薪を拾って歩くのが見える。

ジャマルは、来年こそは何とか水を引いて、と小作人だからこその希望を思い、大きく息を吸う。

用水路建設は増水前の集中工事です

用水路・灌漑計画担当　鈴木　学

用水路建設、米ヘリ下でも黙々と

米軍のヘリが頭上を飛び交うクナール川で、日々用水路建設は着実に進められている。こんなふうに書くとなんだか大げさに聞こえてしまい、不安な心境でびくびく作業をしているように受け取られかねないが、実際にはスタッフ（日本人もアフガン人も）にそんなことを気にしている余裕は全くない、というのが現実である。この冬、最も河川水位が下がる状態で通水を行うため、重機（エクスカベータ＝掘削機四台、ローダー一台、ダンプトラック七台）と、作業員六百人による作業が、淡々と行われる。日本人スタッフに求められる仕事も、アフガン人スタッフへの完全なサポートに徹していた初期に比べ、積極的に牽引していくことが必要な場面も徐々に増えてきたように感じる。そうでなくても遅れることが当たり前のこちらの事業において、クナール川の増水開始時期は待ってくれないため時間勝負になってきているからだ。

実際に用水路C地区の発破作業中に米軍のヘリに発砲されたときも、中村医師を中心に近くのA地区の護岸工事について皆で真剣に検討している最中で、自分は低空で旋回するヘリの音で中村医師の声が聞き取れずにいらいらした記憶がある。現場はそういった状況であり、攻撃用ヘリの旋回する下を米軍車両の大行列が延々続く日も、輸送用ヘリとその後ろに必ずついてくる攻撃用ヘリが忙しそうに飛び交う普段の日も、水路の工事は朝六時半から淡々と進められる（この一ヶ月間はラマダン期間だったため日本・アフガン両スタッフ、作業員全員が休憩・飲食の時間を入れずに七時間を一気に働いた）。

蛇籠作成はイード前に完了

現在、取水口からD地区の溜め池（約二へクタール）までおよそ三キロメートルの区間で集中工事を展開中だ。同時に、取水口工事のためにはクナール川を一時的に堰き止め、川の水を夏の増水時期にできる支流に流す工事が必要となる。できるだけ河川水面を下げた状態をつくって、取水口（水門）工事をより容易に安全に行いたいためだ。したがって今、取水口の四百メートル上流地点には、川幅百メートル以上あるクナール川の真ん中まで堰が突き出ている。イード明けに工事を再開すれば一週間で築堤工事を完了できる状態である。この進行中の築堤工事と、工事によって川の水が来る対岸地区の護岸・制水工事は、すでに蛇籠（じゃかご）（＝布団籠。九十個）も使用してイード前に大急ぎで完了させた。

クナール川の築堤工事（手前に大量の蛇籠が見える）

掘削機の運搬も一日がかり

イード直前の一週間でこの対岸工事を早急に終わらせるためには、どうしてもエクスカベータを一台対岸に送る必要があった。一日がかりでエクスカベータを対岸に送ったとき（クナール川には橋がほとんどないため、対岸を工事するためには一度橋のあるジャララバード近くまでエクスカベータで戻ってから、クナール川の左岸を再び悪路を十数キロメートル登ってこなければならない。おまけに対岸の道が崩れていたため、数キロ手前で河原に下り、エクスカベータで道をつくりながら現場までたどり着かねばならなかった）には、自分の読みの甘さもあり、スタッフに大変苦労をかけた。

休日の金曜にもかかわらず下見に一日つきあっていただき、土曜の当日には八時間かけて途中から道のない河原をきっちり誘導していただいた清宮さん。現場での仕事を終えた後（午後三時）、途中でのエクスカベータ故障を考えて（見事にはずれた）車で対岸に向かう自分を冷静にサポートし、的確な指示でジャララバードに到着する八時半まで一緒に探しに行っていただいた橋本さん。結果的にはエクスカベータも送ることができ、皆無事であったため言うことなしだ。

用水路の掘削現場。全長16キロに及ぶ

自分一人では何もできない

しかし、冷静に場所と情勢を考えるとき、自分ひとりでは何一つできないことも事実である。この日はいつものことながら特別に、頼もしい先輩二人と仕事ができる現在の自分の境遇に感謝した。また、普段の忙しさにラマザン期間中という厳しい条件も重なったこの一ヶ月間、エクスカベータのオペレータとして助人に駆けつけてくれた石橋さんには、清宮さんも自分もずいぶん勇気づけられた。こうした信頼できる日本人スタッフチームの強固な連携なしには、水路事業という困難なプロジェクトを進めていくこと自体まず不可能である。時には冗談や親父ギャグで疲れた心身をリラックスし、仕事の時はきっちり自分の役割を果たしていく、カナルの現場はそんなところだ。

井戸と用水路建設の事務方で奮闘中です

ジャララバード事務所駐在
大越　猛

「縁の下」で雑務全般を担当

会員の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。私は勤務開始以来七ヶ月、ジャララバード事務所のオフィスセクションに配属され仕事をしています。

水源確保、用水路建設、農業計画はいまや正規スタッフ約百五十人、日雇い労働者約八百人を抱える大所帯となっていますが、オフィスセクションはこれらの人達が現場で働くのを裏方で支える縁の下の力持ち的存在です。具体的には、機械・車両・道具などの一切の必要資機材をアレンジしたり、各役所への許可申請・折衝などを行ったり、スタッフの採用・昇給など人事を管理したりと、現場で働くスタッフが最大の成果をあげられるように雑務全般をこなしているといえます。私もそうしたオフィスの性格を受けて、その時々に必要とされる様々な仕事に携わっています。

これらの仕事の多くはそれ自体日本人でなくともできるものですが、最近日本人である自分が彼らとともに仕事をすることの意義があるのだと実感することができるようになりうれしく思っています。

それはＰＭＳを物心両面から支えてくださっている会員の方々の想いを少しでも代弁することです。

ときには「説教」も……

こんなことがありました。活動の様子を記録に収め、日本側へ伝えることも私の仕事の一つですが、ある日用水路の掘削の様子を映像に収めるために、工事現場を訪れたところ、五、六人のスタッフが集まっていました。私が来訪の目的を伝えたところ、彼らは笑い出し「何だ、撮影にきたのか。そんなのは遊びに来たようなもんだな。俺達は大変な仕事をしているのに、君は呑気なもんだなあ。」というのです。私は、一瞬耳を疑いましたが、気をとり直して言いました。「君達は自分達が全て独力で仕事をしていると思いこんでいるようだけれど、これらの工事費用や君達の給料を負担しているのが誰なのか考えたことがあるのかい。これらのお金は全て、日本のドナー（寄付者）が苦労して自分で稼いだお金から善意で削って出してくれたものなんだ。そうした人々の厚意に応え、工事の進捗状況を報告する仕事が本当に遊びだと思うかい」。彼らは、ハッとした様子を見せ、すぐに謝ってくれ、それからはとても協力的になってくれました。

また、こんなこともありました。ペシャワールの病院と連絡を取り、必要なアレンジをするのも私の仕事です。必要に応じて現地ス

聖牛（トライアングル・ポット）の製作風景

タッフの人にも話をしてもらうのですが、通話料が非常に高く、要領良く話さなくてはなりません。そのことをある現地スタッフに頼むと、彼は「大丈夫、高くても僕や君のポケットから出ているわけじゃないから気にすることなんか無いよ」と笑い飛ばす始末。そんなときにも、恥ずかしながら私の説教が始まってしまいます。

会員の想いを伝えることの大切さ

もちろん、彼らに悪気があろうはずがありませんが、こんなやりとりがときどき交わされます。日本へ行ったことのない彼らの中には、PMSの運営資金が、アフガンの困った人たちの役に立ちたいという、多くのドナーの善意の結晶であることに思いが至らず、どこからか無尽蔵に湧き出て来るかのように思い、それがときにコスト意識の低下や、仕事ぶりに影響することもあるようです。そんなときには私も日本人ワーカーの一人として、言うべきことははっきり言うように心がけています。

現地のスタッフと共に仕事をし、ドナーの皆さんの想いを伝えていくことで、提供してくださったお金が実際に少しでも多くの成果となり、アフガンの困った人々に恵みとして届くようにすることも大切な仕事だと考える今日この頃です。

ペシャワール会2004年カレンダー
「風の光陰」（画・甲斐大策）
最終予約、同封ハガキで！
――すでにご予約の方は現在発送中です――

恒例となっておりますペシャワール会カレンダーが完成致しました。本年も、毎号の表紙絵を飾る甲斐大策氏の作です。

タイトルは「風の光陰」。アフガニスタンとその周辺の二千数百年を一挙に駆け抜けるような壮大なテーマで、紀元前2世紀半ばのギリシャ王と印度聖者の問答、そして圧巻のバーミヤーン大涅槃仏（300余m）、ガズニ朝の栄華等、アフガニスタン周辺の土地に生きた人々が7点の絵に描かれております。

価格は1500円（税込。送料不要）です。

同封のハガキで最終予約を受け付けております。

（代金は専用の郵便払込用紙をカレンダーと同送致しますので、会の振込用紙をお使いにならないようご注意下さい）

＊甲斐氏の「表紙絵をめぐる小さな物語」が『聖愚者の物語』（石風社、1890円）として刊行されました。こちらも同封のハガキでご注文できます。

表紙画「往く者、とどまる者」

＊カレンダーのサイズは420mm×530mm

正念場

農業計画担当　橋本康範

この一ヶ間、アフガニスタンはラマダン（断食月）であった。日の出ている間は一切の物を口に出来ない。昼食はもちろん水やお茶、タバコや歯を磨くことすら出来ないのだ。

そして私もこのラマダンに挑戦した。まずは早朝起きるのがつらかった、なので、起きそびれて朝食抜きの二十四時間何も食べないで過ごさねばならない、という羽目にも何度かなった。しかし、なによりもつらかったのは水やお茶が飲めなかったことである。だいぶ寒くなってきたとはいえ日中少し動けば汗は出る。また、休日何も口にしないで過ごす一日も意外ときつかった。夕方、アザーン（モスクからスピーカーを通して礼拝の時を人々に報せる。ラマダン期間は夕方のアザーンが食べ物を口にしてよい合図となる）が聞こえてくる三十分ほど前から人々は準備された夕食を前に今か今かとナン（現地のパン）を手で丸めながら待ちわびる。そしてアザーン後の食にありつくその姿勢はどんな大食い大会に出てくる選手よりも凄まじいものがあった。私もそんな一人になっていた。

そんなラマザンの真っ只中、高橋さん（農業指導員）がアフガニスタンにいらっしゃった。高橋さんも〝ミニ・ラマダン〟を体験されていった。昼食やお茶を抜き、さすがに大好きなタバコは吸っていらっしゃったが、それでも、現地の人たちに申し訳ないから、と言ってだいぶ我慢していらっしゃった。さらに過酷な条件の中、お茶八百五十本の植え付け、ブドウの移植、アルファルファ、ソルゴーなどの現地適応作物の調査、発芽・発育不良であったトウモロコシの調査、用水路への植樹品種の調査、そしてサイレージ（飼料）作り、を行った。一年を通して農業に関して今が最も重要な時期、また、将来のＰＭＳの農業計画を左右する重要なポイントとなる作業ばかりだったので、この大変な時期にもかかわらず高橋さんが来てくださったことは非常に心強かった。

井戸の方は用水路のほうへ多くの人員を配置しているため、一部の地域での活動は縮小してきているものの（アチン郡ではいよいよ最後の井戸の作業に入っている）、日々七十本ほどの井戸の掘削を続けている。また、現在手がけている四つの灌漑用井戸からも水が出始め何とか小麦シーズンに間に合った。現在はタービンポンプの設置に追われている（これを早く済ませてしまわないと各畑で小麦やクローバーの播種をしてしまい、乾いた畑を道路代わりに使用している現在、物品の輸送が困難になる）。

用水路のほうも来年二月まで〝用水路Ｄ地区までの通水〟を目標に全力を挙げている。水深が最低となるこの時期、取水口の建設、

緑が蘇ったダラエ・ヌールの農場

ダラエ・ヌールの灌漑用大井戸

そのための川の堰き止め、また、B・C地区に立ちはだかる巨石の爆破、各地区での蛇籠（じゃかご）の設置準備と大詰めを迎え、早朝五時から夕方まで飲まず食わずのなか、各スタッフが必死に任務を全うした。今はラマダンも終わりイード（ラマダン明けの祭礼、ご馳走や晴れ着を用意して親戚友人の家を訪問する、日本でいう正月の雰囲気がある）を迎えている。

政府、国連、他のNGOが大抵五日から一週間ほどイード休みを設け、国連、他のNGOスタッフにいたってはアフガニスタンを出てペシャワールなどのパキスタンで休暇を楽しむものがほとんどだ。また、現在のアフガニスタンの情勢から早々と活動規模を縮小したり撤退したりしている機関も中にはある。我々はジャララバードに残り、米軍のヘリが頭上を飛ぶ中、庭でバーベキューや鍋をしたり、生きた鶏を買ってきて新鮮で豪快な一羽ね丸ごと蒸しや、から揚げ、グラタン、はたまた天婦羅、アイスなど、アフガンで手に入る材料、道具を最大限に工夫、利用して手料理を作ったり、現地スタッフの家を訪問したりと我々なりのイード休暇（料理）を楽しんだ。そして、いつどうなるか分からない不安定な情勢を見据えて我々はイード休みを三日に短縮し、明日からまた再び〝戦場〟へ向かう。今こそ我々の出番である。

生活、病気、そして患者も「日本と違う」

PMS医師　柴田俊一

はや三ヶ月

八月二十二日、成田発。

太陽を追いかけて、引き離されて、首都イスラマバードに着いたのは夜でした。出発前、現地は「酷暑」と言われて身構えながら降り立った空港の風は涼しく、街は深夜にも関わらず人に満ちていました。

イスラマバードから車で約三時間、ペシャワールの病院に到着したのは、数時間後には日の出を迎えようという頃、案内を受けた部屋のベッドの上で、機上の疲れも異国の雰囲気に飲まれたまま中々寝付けず、ようやく眠気を催したのは窓の外がようやく白くなり始めた頃、それがこの国での初日でした。

それから早三ケ月、夏の暑さも過ぎ、もうストーブが必要な季節になっています。その間、ペシャワールの病院での勤務、カラチの病院でのハンセン病（癩疾）の研修、アフガニスタン内の診療所・農場そして灌漑工事現場の訪問等を経験しましたが、つくづくも思うのは、此処が「日本と違う」という事でした。これは当たり前と言えば当たり前の事ではあるのですが、政教分離を成し、時々にしか宗教を思わせず、整然とし（此処に比べれば日本が如何に整然としている事か！）、各

戸に電気があり水道がありガスがあるというのが不思議に思える程にここは異国でした。

気を使う女性患者の診察

そしてそれは、医療面でも同じでした。まず病気が違います。勿論、風邪や生活習慣病などはこちらでもあるのですが、それ以上に、マラリアやチフスなど、日本では先ずお目にかかれない病気の患者さんやおいそれと病院にかかれない環境の為か、結構悪くなってから来られる方が少なくないのが現状です。

ＰＭＳラシュト診療所（パキスタン）の患者さん

また、女性の患者さんへの診察・処置についてもかなり気を使わなければなりません。胸や腹などを直接触る事はおろか、見る事さえはばかられる状況にあり、畢竟、診察の精度は確実に落ちてしまいます。

これら医療面については、中村医師や仲地医師を初め、多くの医師が報告されている所だと思います為、これ以上書きませんが、その一端として、私が明らかに不馴れな外国人であるという事も関係しているのではと思っています。実際、現地の先生方を含め、端で見ていると、「あれっ、手を触ってる」「お腹を診てる」など、こちらが思っている以上に「普通」に診察をしている場面を時々見かけます。これらは、言葉でコミュニケーションが取れ、且つ現地の風俗・習慣を了解している事から何が良くて何が駄目かをよくご存じな事からかと思われますが、それが患者さんや家族の人にも安心になっているのではと思っております。

変に慣れてしまうのではなく

「まず慣れる事から」と思いつつこちらに来ましたが、むしろ変に慣れて馴れてしまうのではなく、とにかく安心して貰える事、信頼といった大げさな言葉でなく、自然に向き合える事。そういった当然の事が、漸く実感として感じられるまでに三ヶ月もかかってしまいました。次の三ヶ月に何をお伝え出来るか分かりませんが、それまでに安心の形をお伝え出来る様であればと思っております。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、御願いいたします。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

＊会報の発送費に、年間七百万円以上かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。

▼記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

●事務局便り

＊一二月六日、アフガン南東部ガズニ州の村で、米軍の機銃掃射によって九人の子供達が殺された。旧タリバンの幹部を狙った作戦で、ボール遊びに興じる子供達は視界になかったという。私達の用水路建設現場でも、一一月二日、米軍攻撃用ヘリによる誤射があった。この時も発破を見守り退避する数百人の男達は見えず、数頭の羊と一人の男を確認したのみだと言う。幸い被害はなかったが、「毎日攻撃を受け、戦友を失って非常に敏感になっているため」の反射的な攻撃であったと米軍は謝罪した。米軍（アメリカ）は完璧に悪循環に陥っている。米軍の「存在」と「誤爆」によって、民衆の反米感情は高まり、それを背景に反政府組織・民衆が渾然となって反撃する。さらに米軍が、それを「旧タリバン／テロリスト」と決めつけて無差別攻撃する。米軍が相手にしているのは、自分の影である。九・一一以来、ブッシュ政権が行っていることは、「対テロ誘発戦争」であることが明白になりつつある。日本政府は、無原則にブッシュ政権を支持することで、この悪循環にはまり、「人道支援」や「国益」の名で、「軍隊」まで派遣しようとしている。いかに繕おうと、日本政府が米国の顔色を伺い、石油にしか関心が無いことは、現地の民衆からは丸見えである。日本には非軍事の原則に立返るしか道はないはずである。

ペ村から

先日から二〇〇四年カレンダーの発送をお手伝いさせていただいている。カレンダーを巻きながら、事務局にお手伝いに伺うようになってからを思い出した。伺うようになってまだ日が浅いが、驚くことが幾度もあった。まず驚いたのは、事務局の賑やかさだ。みなさんがそれぞれのペースで、かつ和気藹々と作業をしては席を立たれる。事務局の絶えない人の流れに驚いた。そして、何より会の活動を支える会員の方々の多さに驚いた。事務局でお会いする方、会員の方、それぞれがそれぞれの方法で自分の生活の一部を、知らない誰かの為に使う。このような地に足のついた善意の積み重ねが、私が生きてきたのとほとんど変わらない間、継続してきたかと思うと感慨深い。そして今。私の目の前にあるカレンダーもみなさんの善意の表れであると思うと、ついついカレンダーを巻く手にも力が入る。いやいや、力を入れ過ぎてカレンダーにしわをつけてはいけない。（井）

中村哲医師の本

辺境で診る 辺境から見る
【3刷】1800円

ダラエ・ヌールへの道
【3刷】2000円

医者 井戸を掘る
【9刷】1800円

医は国境を越えて
【6刷】2000円

ペシャワールにて
【8刷】1800円

空爆と「復興」 1月刊
―アフガン最前線報告―【予】1800円

聖愚者 甲斐大策の物語

「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に
1800円

石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL 092(714)4838

ほんとうのアフガニスタン
1200円

光文社　東京都文京区音羽1-16-6 TEL 03(5395)8125

アフガニスタンの診療所から
1200円

筑摩書房　東京都台東区蔵前2-6-4 TEL 03(5687)2670

価格はすべて本体価格（税別）です

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行なうことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。役員の改選は毎年総会にて行う。

⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル三〇七号　TEL七三二―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル307
☎（092）731（2372）FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2003年12月17日　No.78　会長 高松勇雄　現地代表 中村哲　事務局長 村上優